

—JNMS のページ—

Journal of Nippon Medical School に掲載した Original 論文の英文 Abstract を、著者自身が和文 Summary として簡潔にまとめたものです。

Journal of Nippon Medical School

Vol. 79, No. 3 (2012 年 6 月発行) 掲載

Mometasone Furoate Nasal Spray Relieves the Ocular Symptoms of Seasonal Allergic Rhinoconjunctivitis

(J Nippon Med Sch 2012; 79: 182-189)

季節性アレルギー性鼻結膜炎患者によるモメタゾンの眼症状改善効果の検討

五十嵐勉¹ 仲里ゆり¹ 国重智之¹ 藤田美徳¹
山田佑美¹ 藤本千晶¹ 大久保公裕² 高橋 浩¹

¹日本医科大学眼科学

²日本医科大学大学院医学研究科頭頸部・感覚器科学

背景: 近年、鼻噴霧用ステロイド薬の季節性アレルギー性鼻結膜炎 (SAR) に対する眼症状改善効果が報告されているが、関連因子は不明であり、眼科医による検討報告もほとんどない。

目的: SAR に対する鼻噴霧用ステロイド薬 Mometasone Furoate Nasal Spray (MFNS) の眼症状改善効果ならびにケミカルメディエーターへの影響を Placebo と比較検討する。

方法: SAR の患者に対し無作為化並行群間二重盲検法により、MFNS 群と Placebo 群に割付し、1 日 1 回 4 週間投与した。投与前、投与 2、4 週後に涙液中の Substance P 濃度を測定し、アレルギー日記による眼や鼻症状のほか、アレルギー性結膜疾患診療ガイドラインに準じて比較検討した。

結果: 投与後 Substance P 濃度は両群間で有意差はなかったものの、Placebo 群 (4 例) で経時的に増加し、MFNS 群 (8 例) での増加は抑制傾向にあった。投与 2、4 週後における各眼・鼻症状スコアは、MFNS 群で Placebo 群と比較し有意に低下し、Substance P と眼・鼻症状スコアの間に関連がみられた。

結論: 探索的研究ではあるが、鼻噴霧用ステロイド薬による涙液中 Substance P への影響が確認され、Substance P と鼻症状との関連性が示唆された。

Usefulness of a Semicircular Capsulotomy Marker

(J Nippon Med Sch 2012; 79: 195-197)

半円式 CCC マーカーの有用性

鈴木久晴¹ 志和利彦² 小原澤英彰¹ 高橋 浩²

¹日本医科大学武蔵小杉病院眼科

²日本医科大学眼科学

目的: CCC (continuous curvilinear capsulorhexis) を作成する際における、新しく考案された半円式 CCC マーカーの有用性を評価する。

方法: 対象は白内障手術予定の患者 20 人 20 眼である。新しく設計された直径 5.5 mm の半円の形をした CCC マーカーで水晶体の前囊上に直接マーキングし、そのマーキングに沿って CCC を作成した。各々の症例はビデオで録画し、手術後に画像上で CCC のサイズを計測し検討した。

結果: CCC の直径のサイズの平均は 5.2 ± 0.3 mm であった。すべての症例において CCC は眼内レンズに対して complete cover であった。

結論: 半円式 CCC マーカーは、完全な CCC のサイズを決定するのに有用であった。

Journal of Nippon Medical School

Vol. 79, No. 4 (2012年8月発行) 掲載

Objective Assessment of Postoperative Gastrointestinal Motility in Elective Colonic Resection Using a Radiopaque Marker Provides an Evidence for the Abandonment of Preoperative Mechanical Bowel Preparation
(J Nippon Med Sch 2012; 79: 259-266)

結腸切除術における放射線不透過マーカーを使用した術後消化管運動の客観的評価と、術前機械的腸管洗浄省略の正当性の検討

佐々木順平 松本智司 菅 隼人 山田岳史
小泉岐博 水口義昭 内田英二
日本医科大学大学院研究科臓器病態制御外科学分野

大腸切除術に対する術前機械的腸管洗浄 (MBP) は、最近多くの報告で懐疑的である。一方で ERAS (Enhanced Recovery After Surgery) プロトコールにおいて術前 MBP の省略は重要な要素であり、基本コンセプトのうちの一つである術後消化管機能不全の早期回復に寄与すると考えられている。

今回われわれは放射線不透過マーカーを使用し、術後腸管運動を客観的に評価し、MBP が術後腸管運動に及ぼす影響を比較検討することにした。

2009年に当科で行ったすべての大腸癌予定手術症例を MBP 群と MBP 省略群にランダムに振り分け、すべての割り付け患者に術前にマーカーを服用させ、レントゲン検査でマーカーの局在を確認することにより、その推移の実際を比較し検討した。

マーカーの推移を腹腔鏡手術群 (LAC) と開腹手術群 (Open) に分けて検討すると、Open の MBP 省略群における術後5日目と7日目のマーカー排泄率が、MBP 群と比較して有意に高く、7日目の Open MBP 群のマーカー排泄率が他群と比較して有意に低下していた。多変量解析で、MBP 省略がマーカー排泄率に有意に高い相関があるという結果になった。

以上の結果から、MBP 省略は術後腸管運動改善を促進させる重要な要素であることが示唆された。今回われわれは過去の報告と同様に、結腸切除術における術前 MBP 省略の有益性を実証し、この結果は ERAS プロトコールと矛盾しないものであると考えられた。

Bone Changes Associated with Soft-tissue Tumors of the Hand

(J Nippon Med Sch 2012; 79: 267-273)

手の軟部腫瘍による骨変化

北川泰之¹ 玉井健介¹ 角田 隆² 澤泉卓哉²
高井信朗²

¹日本医科大学多摩永山病院整形外科

²日本医科大学大学院医学研究科感覚運動機能再建学分野

手に発生した軟部腫瘍に関連した骨変化は骨腫瘍との鑑別に難渋するなどの問題を有するがこれまでに包括的な検討はほとんど見られない。このような骨変化の臨床的および X 線学的特徴を明らかにするために手の軟部腫瘍および腫瘍類似疾患を有した 137 患者 (軟部肉腫 2 例を含む) について診療記録および X 線フィルムを用いてレトロスペクティブに検討した。骨変化は 137 例中 21 例に見られた。骨変化を伴う腫瘍はすべて良性腫瘍であり腱鞘巨細胞腫が最多であったが種類は多岐にわたった。骨変化が最も多く認められた部位は指骨の骨幹部遠位から骨頭にかけての掌側部分であった。骨変化のほとんどは境界明瞭なびらんであり、その形状から入口部の拡大をあまり伴わず深度を増す傾向にあると推測された。臨床的に問題になることの多いいわゆる深く急峻なびらんは 5 例に認められたが搔爬のみで骨の再建を必要とせず再発も見られなかった。